

各施設年次報告

芦生研究林年次報告

芦生研究林長 芝正己

●教育研究

本年度における芦生研究林の利用者総数は延べ 10,439 名（前年度 10,880 名）であった。このうち教育面を主体とした利用者数は全体の 20.7%を占める 2,157 名（公開講座を含む実習等）で、前年（1,723 名）より増加した。利用申請総数は 37 件（前年度 35 件）で、そのうち学内からが 22 件（フィールド研：6、農学部等 3、他学部等 13）、他大学等からが 15 件（大学：1、その他：14）であった。学内他学部の利用は年々増加しており、全学共同利用施設として認知されて来ていることが伺われる。また、研究機関以外からの利用では、シニア自然大学の利用が目立って増加しており、シニア世代の環境に対する関心の高さが伺える。次に、研究を目的とする利用者数は、全体の 15.0%を占める 1,569 名（前年度 1,338 名）であり、全体で 57 件（前年度 48 件）の利用申請を受け付けた。このうち学内の利用が 32 件（フィールド研：8、農学部等：16、他学部等：8）、他大学等から 25 件（大学：7、官公庁：5、個人：13）であった。センター内のプロジェクトでは、「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」木文化・由良川プロジェクトが本格的に始動し、由良川の最上流部にあたる当研究林もフィールドの一部として重要な役割を担うことが期待されている。



木文化・由良川プロジェクト

●社会連携

社会連携としての一般開放事業は、研究林内の自然観察・体験実習、ハイキングなどを目的として、全体で 27 件の申請（前年度 24 件）があった。センターの主催事業として 1991 年以来続いてきた公開講座は今年で 19 回目を迎え、「森のしくみとその役割—森の動きをつかむ（Long Term Research）—」というテーマで開催された（7 月 24～26 日・受講生 35 名）。これとは別に、芦生研究林主催事業として、「芦生の森自然観察会」を春（5 月 30 日）と秋（10 月 24 日）に実施した。共同開催事業として継続的に実施している活動で、本年度も引き続き行われたものは、①森林体験学習：和歌山県立有田中央高校清水分校（ANA 協力）、②美山町小学校合同自然体験教室「美山っ子グリーン・ワールド」：美山町内小学校第 4 学年、③北桑田高校「郊外森林体験実習プログラム」：京都府立北桑田高校森林リサーチ科学生、④京都市教育委員会：長期宿泊・自然体験推進事業：京都市立葛野小学校、京都市立桂徳小学校、京都市立一橋・今熊野・月輪小学校 3 校合同であった。



第 20 回緑の少年団全国大会

さらに今年度は、京都府の要請により第 20 回緑の少年団全国大会の受け入れを行った。青森・山形・茨城・新潟・長野・静岡・愛知・奈良・香川・愛媛・佐賀・長崎・熊本・宮崎・京都の 15 の県から 96 名が参加し、主催の行政関係者、芦生職員及び地元の公認ガイドの案内の元、西日本屈指の天然林が広がる上谷コースを散策した。全員元気に一日を過ごせたのが何よりだった。

●施設の特記事項

芦生研究林のトロッコ軌道が、経済産業省「近代化産業遺産」11 群の「山間地の産業振興と生活を支えた森林鉄道の歩みを物語る近代化産業遺産群」として平成 20 年度に認定を受けた。最盛時 7.7km の森林鉄道は、木橋の老朽化等により走行可能距離 1.6km に減少してはいるが、林内巡視や資材運搬などに利用される現役の「動くトロッコの」姿で現存しており、認定を受けてからは自然観察やハイキングで訪れる人に交じり、鉄道マニアの姿も見られるようになった。



トロッコ軌道



近代化産業遺産認定書

北海道研究林年次報告

北海道研究林長 安藤信

●教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を生かして全学共通および農学部の実習が年4回行われている。

「調査研究方法実習Ⅰ」は研究林を拠点に、国有林・知床自然センターの協力の下、世界自然遺産の知床半島や阿寒・釧路湿原国立公園の森林・林業・自然環境を調査し、人と自然の新しい関係を探ることを目的としている。8月3日～8日の6日間、農学部の食料・環境経済学科の2回生4名が参加した。

「森里海連環学実習Ⅱ」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森・里・海の繋がりを学ぶ。8月30日～9月5日の7日間、標茶管理棟と北海道大学厚岸臨海実験所を拠点に、本学理学部、法学部、農学部、総合人間学部の1～4回生10名と、北海道大学医学部、工学部、農学部、水産学部1回生9名の計19名が参加した。

「北海道東部の人と自然・研究林実習Ⅲ」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに森林作業を体験する。9月5日～12日の8日間、農学部、法学部、総合人間学部の1～3回生19名が参加した。

「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習Ⅳ」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。2月23日～3月1日の7日間、農学部、教育学部、情報学研究科の学部1回生～修士2回生12名が参加した。



森里海連環学実習(厚岸湖調査)



研究林実習Ⅲ(赤岳登山)

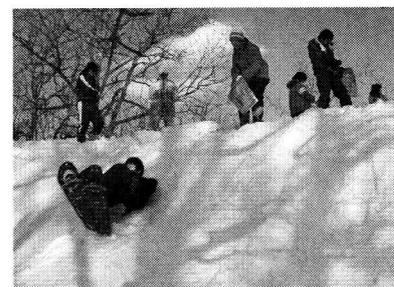


研究林実習Ⅳ(白糠天然林観察)

●社会連携

「木工体験学習(沼幌小学校共催)」は、自然の中で木工工作を体験し、木工に対する興味・関心や自然に対する敬愛心を育てることを目的としている。6月24日に小学生11名が参加した。

「しべちゃアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座(標茶町教育委員会共催)」は、地元にある京都大学研究林を知るとともに、森林の役割や樹木の観察・識別法を学ぶことを目的とする。11月7日～8日に小学生7名と、リーダーの高校生5名が参加した。さらに、「冬の野外活動」と題して、1月30日～31日にも実施され、ここでは、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察し、厳しい寒さに



アドベンチャースクール

立ち向かう動植物の知恵を学ぶことが目的とされた。小学生3名とリーダーの高校生7名が参加した。

●施設の特記事項

研究林（標茶・白糠区）では、ほぼ60年前の設置以来、両区ともに林地の一部しか土地登記が行われていない。会計検査院の指摘を受けて、資産センターの指導のもとに登記に向けた事前調査が行われた。

また、地球の気候変動に伴って、最近、北海道の気象条件にも変化がみられる。白糠区では6月22日～23日にかけて24時間で165mmの降雨があり、白糠区8林班の和天別川に架かるコルゲート橋の基礎部分が洗掘され倒壊する危険性が生じた。緊急に補修工事を行うとともに、傾いた3林班大平2号川に架かるコルゲート橋袖擁壁の補修も行った。研究林内の林道・河川に関わる構造物は長年の使用によって傷みが激しい。教育・研究を安全に遂行するためには、今後、計画的に再整備していく必要がある。

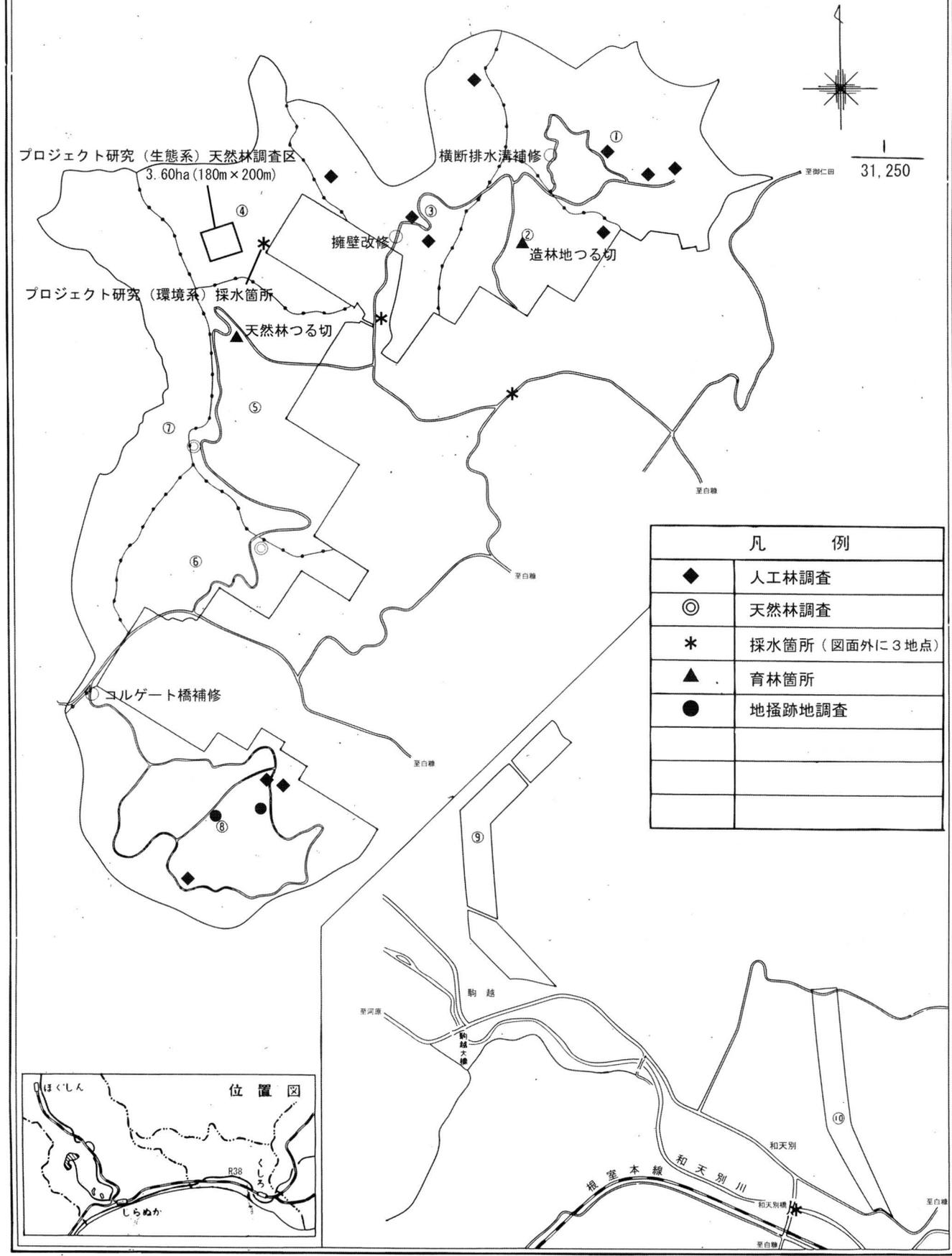


北海道地方演習林業務担当者会議
(10/7～9開催)

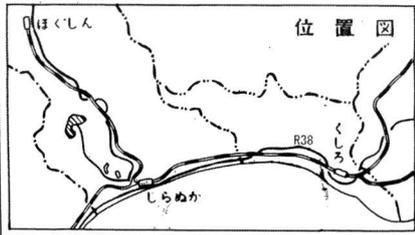


コルゲート橋（白糠8林班）

京都大学北海道研究林白糠区 年次報告附図



凡 例	
◆	人工林調査
◎	天然林調査
*	採水箇所 (図面外に3地点)
▲	育林箇所
●	地掻跡地調査



和歌山研究林年次報告

和歌山研究林長 柴田昌三

●教育研究

和歌山研究林では、2009年度に研究利用として14件の利用申請を受け入れた。利用者の所属は京都大学からはフィールド研から3件、東南アジア研究所から2件、農学研究科から1件である。また、他大学から東京大学農学生命科学研究科、奈良女子大学、大阪市立大学、名城大学から各1件、公立研究施設から和歌山県立環境衛生研究センター、同県立自然博物館、大阪市立自然史博物館から各1件、民間研究施設からは日本野鳥の会和歌山県支部から1件の研究利用があった。合計313人日の利用があったが、滞在型の研究は少なく、滞在可能な施設整備の必要性が改めて示される利用実績となった。

教育利用としては、2009年度は合計10件の申請を受け付け、470人日の利用があった。京都大学からの教育利用は少数セミナー「森のつくりだすもの」による利用があった。参加者は1回生2名であった。和歌山研究林が位置する有田川水系の水質調査、林内の観察やチェーンソーの使用方法、河川の生態調査の手法等を学ぶ内容であった。一方、和歌山研究林では従来から地元の連携を重視した活動を行っており、2009年度もこれが積極的に行われた。これは社会連携事業としても位置づけられるものである。県立有田中央高校清水分校を対象にしては、「ウッズサイエンス」と「森林ウォーク」を行った。前者は3年生を、後者は1年生を対象にしたものである。また、同分校の1年生に対しては、(株)全日本空輸の支援を受けて、芦生研究林と上賀茂試験地を訪れる実習も行った。これは直接和歌山研究林を利用するものではないが、フィールド研の利用を促進する一つの事例として特筆すべきものである。有田川町立八幡中学校に対しては職場体験の場を提供し、2年生4名が参加した。造林地プロット調査や丸太の検収作業を経験した。また、有田川町立八幡小学校の5年生を対象としては、環境を課題として地域の自然に関心を持ち、自然とともに生きることについて考えることを目的とした「森は友だち 森林の町清水」を行い、樹木識別学習、植林体験をした。2009年度の教育利用は京都大学からの利用は1件のみであったことから、学内に対する教育機会の提供を促進する必要がある結果となった。

●社会連携

2009年度に和歌山研究林は前述の地元の高校、中学校、小学校に対する社会連携活動以外に、二つの活動を行った。一つは有田川町役場産業課が主催する「紀の国森づくり基金活用事業」に対する協力であり、もう一件は後述のような県立自然公園指定に伴って和歌山県自然環境室が企画した城ヶ森鉾尖県立自然公園新規指定記念イベントである。

●施設の特記事項

2009年度にはセンター予備費によって気象観測機器（温湿度計、雨量計、風向風速計、日射計）の更新が行われた。新たに地温計も追加された。特に湿度計に関しては高精度のセンサーとなったため、これまで課題とされてきた高湿度の測定においてより正確な測定値が得られることが期待されている。2009年4月28日付和歌山県報第2057号、同県告示第611～613号によって本研究林のうち、国定公園の指定を受けていなかった部分の全域が新たに城ヶ森鉾尖県立自然公園の一部として指定された。特に高標高域は第一種特別区域になっている。この指定に伴い、前述のようなイベントが開催されたほか、2林班の町道沿いと下がり滝に県により看板が設置された。

2009 年度和歌山研究林年次報告写真



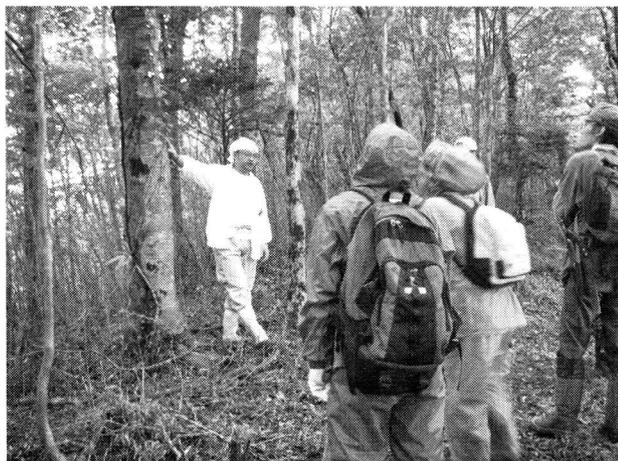
ウッズサイエンス



プロジェクト研究



モニタリングサイト 1000



ポケゼミ

2009 年度和歌山研究林年次報告写真



県立自然公園記念イベント



職業体験（八幡中）

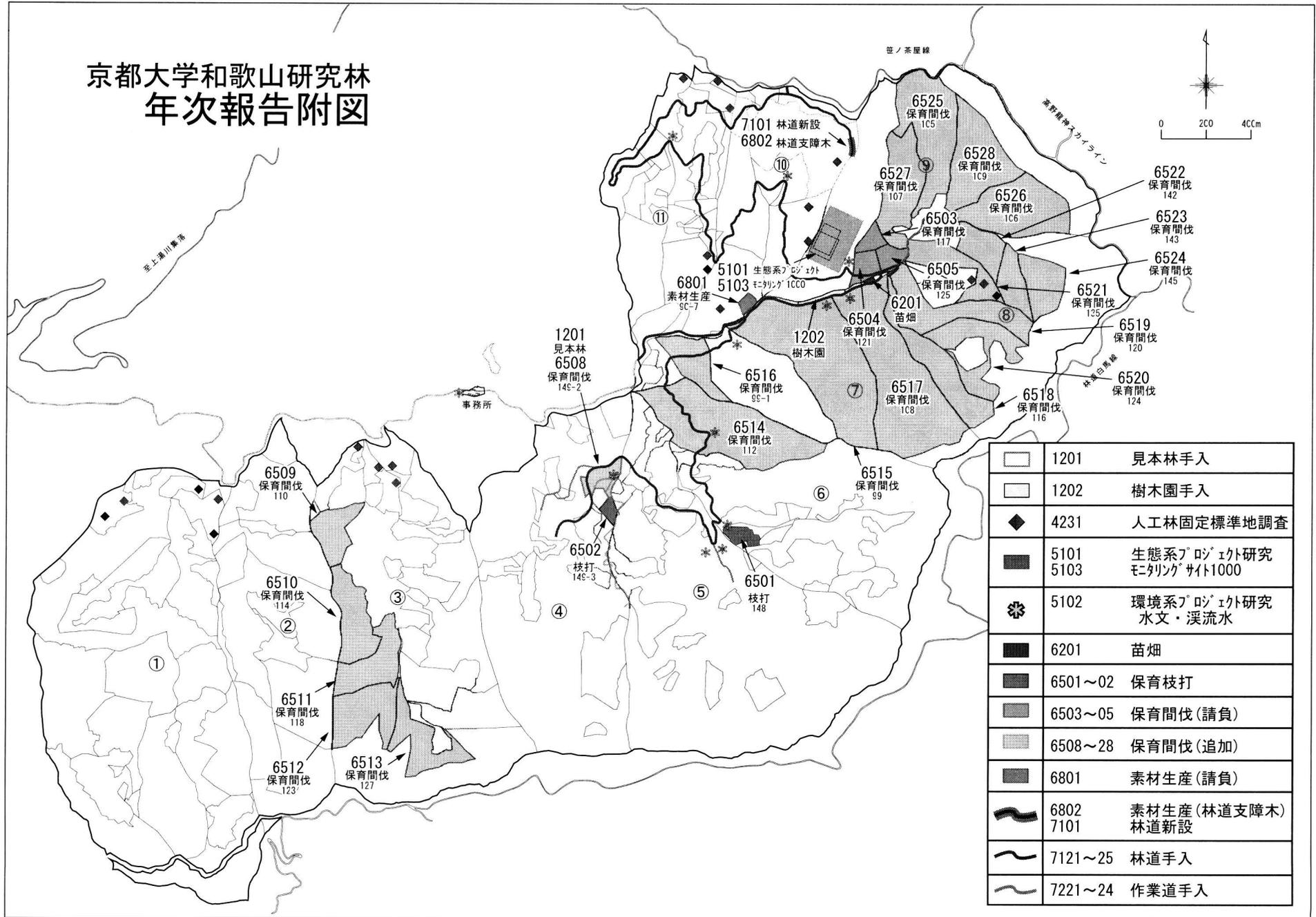


森林体験学習（森づくり基金）



森林体験学習（八幡小）

京都大学和歌山研究林 年次報告附図



	1201	見本林手入
	1202	樹木園手入
	4231	人工林固定標準地調査
	5101 5103	生態系プロジェクト研究 モニタリングサイト1000
	5102	環境系プロジェクト研究 水文・渓流水
	6201	苗畑
	6501~02	保育枝打
	6503~05	保育間伐(請負)
	6508~28	保育間伐(追加)
	6801	素材生産(請負)
	6802 7101	素材生産(林道支障木) 林道新設
	7121~25	林道手入
	7221~24	作業道手入

上賀茂試験地年次報告

上賀茂試験地長 柴田昌三

●教育研究

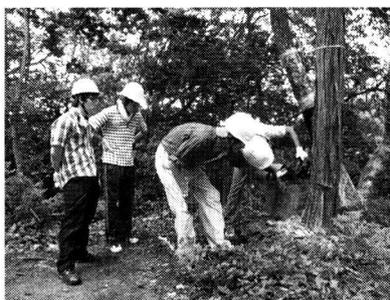
上賀茂試験地では、2009年度も盛んな研究利用、教育利用があった。研究利用は34件の申請があり、学内からの申請が4分の3を占めた。研究による年間利用者数は982名であった。最も頻繁に研究者が訪れた研究テーマでは、年間延べ191人日が利用した。本部キャンパスから至近の距離に所在する上賀茂試験地の立地特性が、集中的な調査研究を必要とするテーマを持つ研究者にとって、貴重な存在であることが示される実績となった。

教育に関しては合計29件の利用があり、延べ1,181人日が訪れた。学内からの利用は12件であり、フィールド研、農学部森林科学科、理学部、農学研究科地域環境科学専攻、大学院地球環境学舎の利用であった。学外からの教育利用は59%を占め、他大学からの利用は京都府立大学、京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学によるものであった。研究機関以外からの利用も3件あり、これらは民間団体からの利用であった。学外諸団体にとっても上賀茂試験地が維持管理する植物や植生が大きな魅力になっていることがわかる。

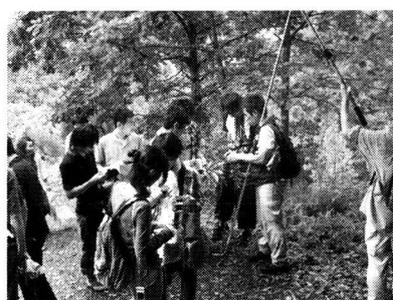
以上のような利用を総括すると、2009年度の上賀茂試験地の利用は、利用申請が合計66件あり、一般市民の見学等の利用も含めると延べ2,502人が上賀茂試験地を訪れた。



森林科学実習IV



少人数セミナー



府立大実習

●社会連携

社会連携活動として、上賀茂試験地は2009年度も春と秋に自然観察会を開催した。多数の応募があり、その中にはリピーターが多く、初めて訪れる経験を数多くの方々に提供できるよう、苦心の絶えない選抜作業が伴った。これらの活動以外にも、学外の諸団体が主催する観察会を積極的に受け入れた。フィールド研が社会環境活動を目的として協定しているエコロジー・カフェとのイベントも4回目を行った。2009年度にはテーマを「里山」とし、農学研究科の大澤講師を迎えて行った。また、共催事業として、京都市北区との「環境セミナー」と京都自然教室との「世界のマツについて」を行った。いずれも上賀茂試験地が維持管理してきた里山やマツ類コレクションを題材としたものである。



秋の自然観察会



エコの寺子屋

●施設の特記事項

2009年度の上賀茂試験地における最大の変化は学内営繕要

求経費による育種用交配温室(ガラス室)の改修である。対象ガラス室は 1961 年建設の建物であり、ガラス落下の危険性から公開できない状態であった。改修でその機能は格段に向上し、亜熱帯域の植物の育成の可能性が高まったことは、上賀茂試験地としての潜在力が高まったことを意味する。

部局内経費でレーザー彫刻機を購入した 樹木園としての機能を向上させる必要性が高まっている上賀茂試験地では、樹木種名のネームプレートが充実することが急務となっており、これが促進できることとなった。この機械は他施設の施設充実にも適応できるものである。センター予備費では高性能 GPS を購入した。様々な活用が考えられ、今後の上賀茂試験地の種々業務に高く貢献するものである。

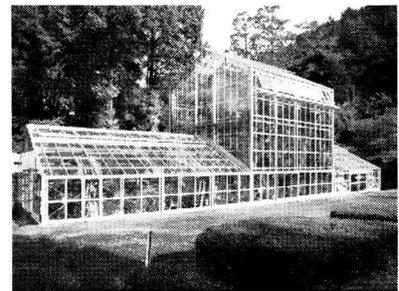
上賀茂試験地では 2009 年度もカシノナガキクイムシによるナラ類の枯死が継続し、自然植生中のコナラ 30 本、樹木園にある樹木とあわせて合計 37 本、15 m²の被害が確認された。その予防的な個体保護作業として、根元から高さ 3m までの幹部をナイロンでラッピングを 200 本以上に対して行い、一定の結果を得た。枯死材は前年度末に購入・設置した薪ストーブの燃材として活用、上賀茂試験地事務所棟の暖房費を前年比 40%削減できた。マツ枯れ被害も継続したが、貴重樹種の保護を図った。

上賀茂試験地では設置以来、100 を超える海外各地の植物研究機関と交流を持ち、種子交換業務を継続している。2009 年度には、芦生研究林、和歌山研究林、京都北山(八丁平)、比良山(滋賀県大津市)、徳山試験地、上賀茂試験地内において種子採集を行い、47 科 75 属 122 種を掲載したリストを作成した。この中には前年度採取種子 7 種、重複種子 1 種を含んでいる。リスト中で種数が多かったのは、カエデ科、カバノキ科、ツツジ科、バラ科、ブナ科などである。本年度のリストの送付先は 40 カ国、134 機関であった。これに対して 60 機関から、延べ 744 種の注文を受けた。注文の大半はヨーロッパから、次いでアジア、北米からであった。人気が高かった種はオオイタヤメイゲツ、ウラジロガシ、テツカエデなど、科レベルで見るとカエデ科、ブナ科の人気が高かった。

上賀茂試験地が行った発注は 42 科 231 種であった。その中心は、上賀茂試験地が早くから収集しているマツ科 39 種に加えて、近年収集に力を入れているブナ科 30 種である。受領した種子のうち、33 科 76 種を播種し 21 科 35 種の発芽個体を得た。受領した種子は保存状態等、質の面で問題があるものが多く、実際に個体として得られる種はそれほど多くない。また、発芽した個体も、今後上賀茂試験地で成熟した個体になるかどうかは、今後の十年以上にわたる根気強い管理にかかっている。なお、播種しなかった種子については、標本として収納した。



北区民環境セミナー



改修されたガラス室



ネームプレート



薪ストーブ

表-1 リスト掲載種別種数

科名	種数	科名	種数
ACERACEAE	カエデ科	MAGNOLIACEAE	モクレン科
ACTINIDIACEAE	マタビ科	MYRICACEAE	ヤマモモ科
ANACARDIACEAE	ウルシ科	MYRSINACEAE	ヤブコウジ科
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	NYSSACEAE	ヌمامズキ科
ARALIACEAE	ウコギ科	OLEACEAE	モクセイ科
BETULACEAE	カバノキ科	PINACEAE	マツ科
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	PITTOSPORACEAE	トベラ科
CELASTRACEAE	ニシキギ科	PODOCARPACEAE	マキ科
CHLORANTHACEAE	センリョウ科	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科
CLETHRACEAE	リョウブ科	ROSACEAE	バラ科
CORNACEAE	ミズキ科	RUTACEAE	ミカン科
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	SAPINDACEAE	ムクロジ科
DAPHNIPHYLLACEAE	ユズリハ科	SAXIFRAGACEAE	ユキノシタ科
ERICACEAE	ツツジ科	SCHISANDRACEAE	マツブサ科
EUPHORBIACEAE	トウダイグサ科	SCROPHULARIACEAE	ゴマノハグサ科
EUPTELEACEAE	フサザクラ科	STACHYURACEAE	キブシ科
FAGACEAE	ブナ科	STAPHYLEACEAE	ミツバウツギ科
FLACOURTIACEAE	イイギリ科	STYRACACEAE	エゴノキ科
HIPPOCASTANACEAE	トチノキ科	SYMPLOCACEAE	ハイノキ科
JUGLANDACEAE	クルミ科	TAXODIACEAE	スギ科
LARDIZABALACEAE	アケビ科	THEACEAE	ツバキ科
LAURACEAE	クスノキ科	VERVENACEAE	クマツヅラ科
LEGUMINOSAE	マメ科	VITACEAE	ブドウ科
LORANTHACEAE	ヤドリギ科		
		合計	122

*前年度採取種子7種、重複種子1種含む

表-3 受注件数上位9種

表-2 受注状況

地域	リスト発送数 (機関)	受注件数 (機関)	受注延べ数 (種)	発送延べ数 (種)
欧州	108	49	584	583
北米	14	5	69	69
アジア	9	5	75	75
オセアニア	3	1	16	16
合計	134	60	744	743

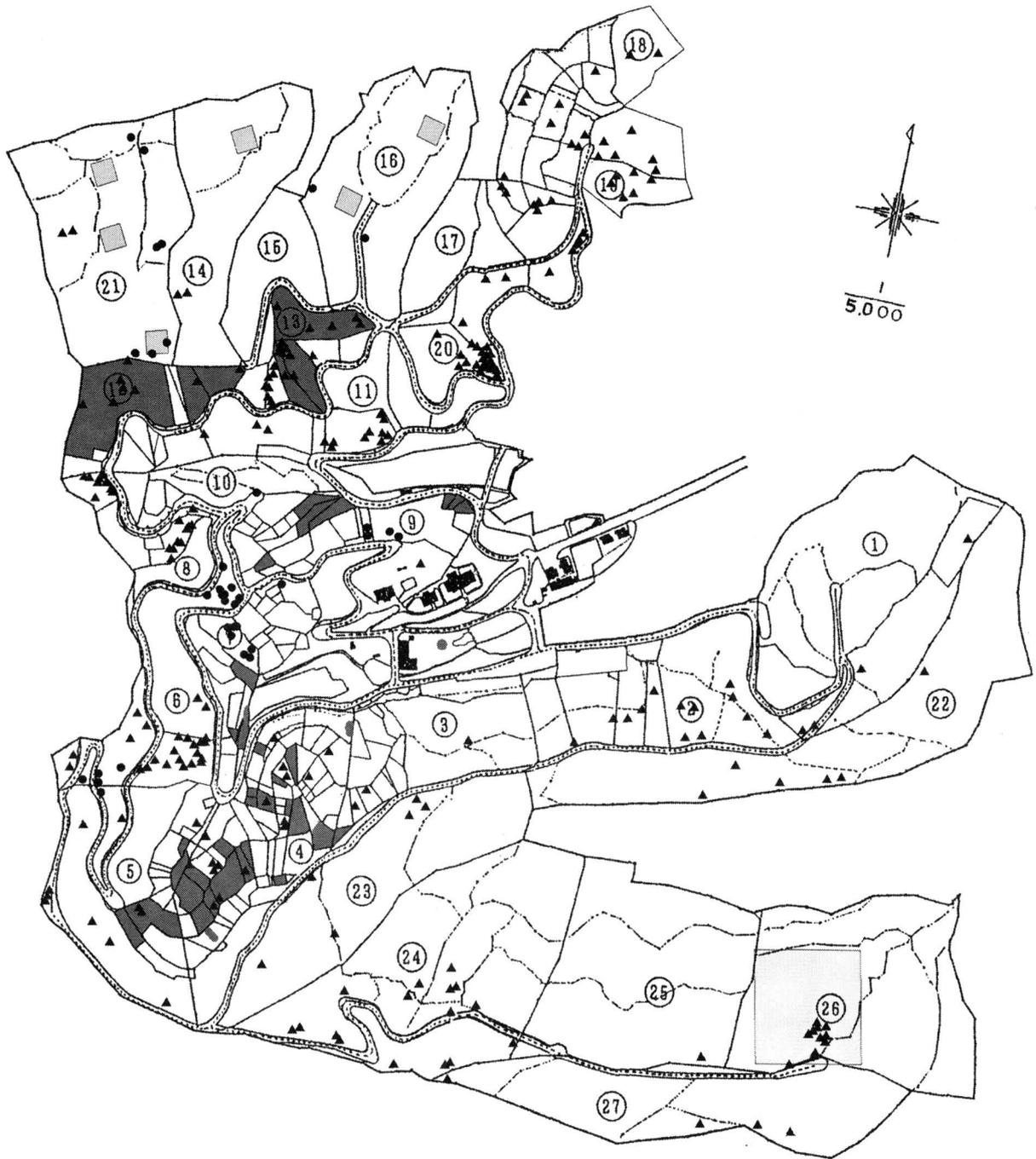
種名	受注件数(機関)	
オオイタヤメイゲツ	Acer shirasawanum	19
ウラジロガシ	Quercus salicina	18
テツカエデ	Acer nipponicum	17
ミズナラ	Quercus crispula	16
クリ	Castanea crenata	15
コハクウンボク	Styrax shirataiana	15
ザイフリボク	Amelanchier asiatica	15
アカシデ	Carpinus laxiflora	13
トチノキ	Aesculus turbinata	12

表-4 発注種数

科名	発注種数	科名	発注種数
ACERACEAE	カエデ科	HAMAMELIDACEAE	マンサク科
ACROSTICHACEAE	イノモトソウ科	LARDIZABALACEAE	アケビ科
ADIANTACEAE	ホウライシダ科	LEGUMINOSAE	マメ科
ANACARDIACEAE	ウルシ科	LYCOPODIACEAE	ヒカゲノカズラ科
ANNONACEAE	パンレイシ科	MAGNOLIACEAE	モクレン科
ARAUCARIACEAE	ナンヨウスギ科	MORACEAE	クワ科
ASPLENIACEAE	チャセンシダ科	MYRTACEAE	フトモモ科
BETULACEAE	カバノキ科	NOTHOFAGACEAE	ナンキョクブナ科
BIXACEAE	ベニノキ科	NYSSACEAE	ヌمامズキ科
BUXACEAE	ツゲ科	PINACEAE	マツ科
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	PITTOSPORACEAE	トベラ科
CARICACEAE	パパイヤ科	PLATANACEAE	ブラタナス科
CELASTRACEAE	ニシキギ科	POLYPODIACEAE	ウラボシ科
CORNACEAE	ミズキ科	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	ROSACEAE	バラ科
CYCADACEAE	ソテツ科	RUBIACEAE	アカネ科
EBENACEAE	カキノキ科	RUTACEAE	ミカン科
EPHEDRACEAE	マオウ科	SAPINDACEAE	ムクロジ科
ERICACEAE	ツツジ科	TAXODIACEAE	スギ科
FAGACEAE	ブナ科	THYMELAEACEAE	ジンチョウゲ科
GROSSULARIACEAE	スグリ科	WELWITSCHIACEAE	ウエルウエツチア科
		合計	231

京都大学上賀茂試験地

年次報告附図



凡 例	
	人工林毎木調査
	天然林固定標準地調査
	マツ枯れ被害木調査
	ナラ枯れ被害木調査

徳山試験地年次報告

徳山試験地長 中島皇

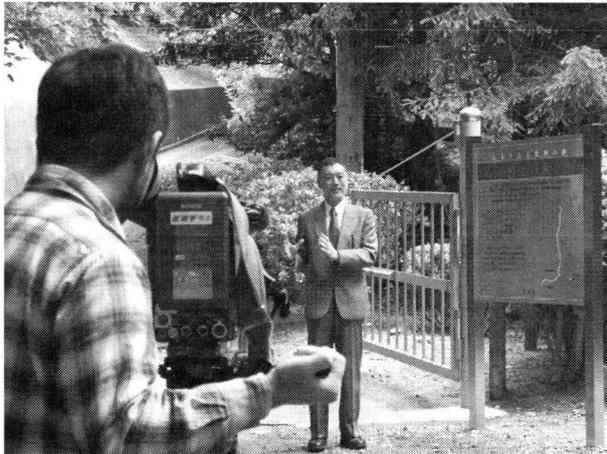
●教育研究

「瀬戸内に見る森里海連環」(少人数セミナー(ポケゼミ):全学共通科目)が特任教授向井宏先生の協力を得て、8/3～6の日程で実施された。1回生男子3名(工2、農1)が天候にも恵まれ、徳山試験地と末武川の上流から瀬戸内海(大島干潟)までをフィールドとして森と里と海の繋がりを実体験した。徳山試験地としては久しぶりの実習で、手探りではあったが、無事実習を終えることが出来た。次年度はより充実したものにすべく、プログラムの内容をスタッフで検討している。



人工干潟見学(ポケゼミ)

●社会連携



ふるさと文化財の森設定説明板除幕式

より花崗岩のマサ土が広く分布する近隣の防府市では、老人ホームや国道262号線が被災し、死者14名の大きな災害となった。

前年度に設置された「ふるさと文化財の森(檜皮)」の看板(説明板:文化庁)の除幕式及び説明会と徳山試験地一般公開を周南市教育委員会と共催で開催した。報道関係者及び一般市民20名の参加があった。

●施設の特記事項

7月20日から21日にかけて295.5mmの降雨があり、特に7/21の6:00～13:00には217.5mmの集中豪雨となった。道路への出水のため試験地へ出勤不能となり、職員は自宅待機となった。当試験地ではのり面の崩壊(4㎡)程度の被害であった。しかし、この雨に

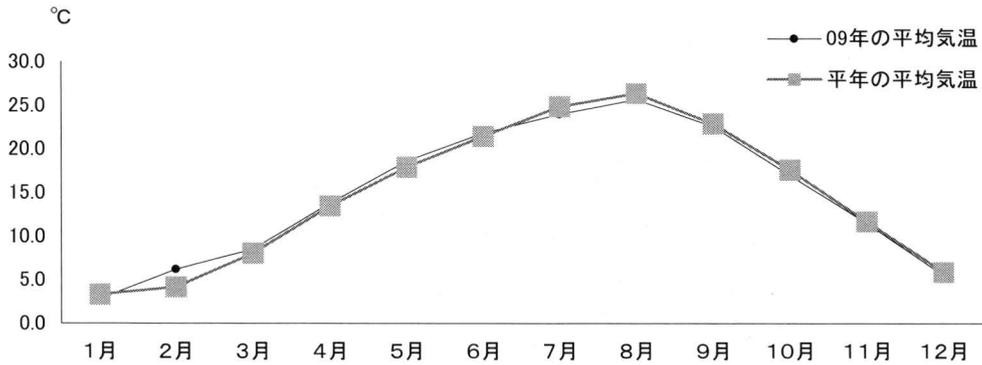


集中豪雨被害状況



大雪の状況(3/10)

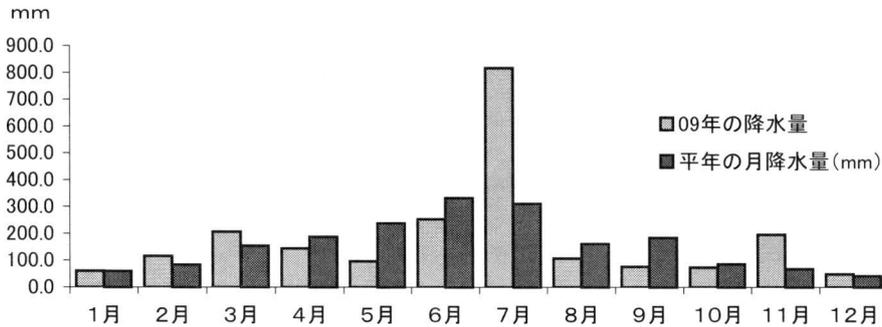
徳山試験地の気象環境



月平均気温平年比(2009年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(°C)	2.8	6.2	8.5	13.8	18.6	21.8	24.0	25.7	22.6	17.0	11.5	5.5
平年の平均気温(°C)	3.3	4.2	8.0	13.4	17.9	21.5	24.9	26.4	22.9	17.6	11.7	5.9

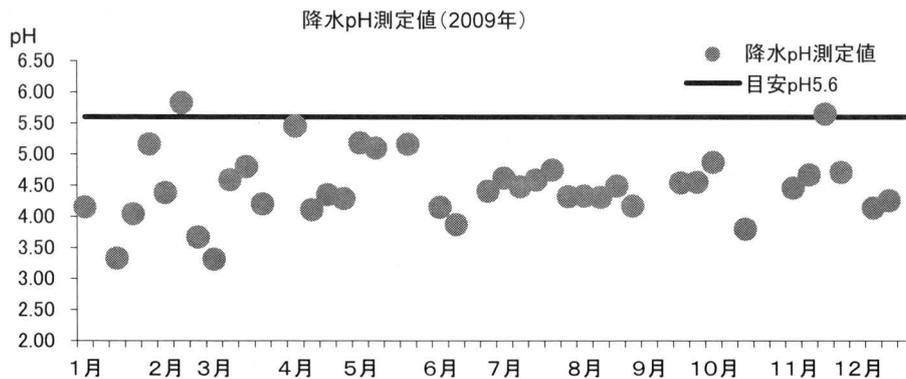
※1979年～2008年の平均気温



月降水量平年比(2009年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月降水量(mm)	60.5	116.0	206.5	144.5	97.0	254.0	817.0	108.0	76.0	74.0	196.5	48.5
平年の月降水量(mm)	59.3	83.5	154.6	188.2	237.6	332.3	311.2	161.0	184.2	86.3	67.8	42.3

※1979年～2008年の平均気温



北白川試験地年次報告

北白川試験地長 長谷川尚史

●教育研究

北白川試験地は、フィールド研の中で唯一本部キャンパス内に所在するフィールドである。面積が小さいため、大規模な研究・試験地の設定は不可能であるが、講義時間内での実習が可能であり、また試料をすぐに研究室に持ち帰り分析できることから、教育・研究両面における利用件数が非常に多くなっている。本年度も枝葉採取、土壌採取、植物観察等の比較的小規模な実習、苗畑での植栽試験やガラス室内での鉢植えによる育成試験などの研究など、46件の利用があった。その他学内の種々のイベントに利用される例も多く、2009年度は、理学部植物園が開催している観察会（定員30名）や森林科学専攻のオープンキャンパス（22名）などに利用された。

●施設の特記事項

2009年度は、前年度に続いて数本のマツクイムシ被害が発生し、4本が枯死した。ただし1本のウツクシマツは被害を免れ、個体が維持されている。

試験地西端の見本園樹木から隣接する民有地への落葉が多くなり、地域住民に迷惑がかかっていたことから、必要性の低い高木の伐採および剪定を請負と直営で行った（伐採3本、剪定18本）。

試験地南東のシダレザクラの樹勢回復のために、数年前から周辺の土壌改良および立ち入り制限を行っている。今年度は2回目の土壌改良工事を実施した。



枯損枝剪定作業



肥料散布拌作業

苗畑周辺の見本樹が大きくなり、苗畑の日照環境が悪化しており、風倒の恐れも生じているため、針葉樹大径木の伐採を行った（コウヨウザン1本、スラッシュマツ1本、テーダマツ2本）。伐採に当たっては、苗畑で行われている研究や他の見本樹への影響を抑えるため、クレーンなどを用いた。経費が高額となり影響のある高木すべては伐採できなかつたため、次年度以降も継続して処分を検討する。



肥料と土壌の攪拌作業



高木伐採（コウヨウザン）



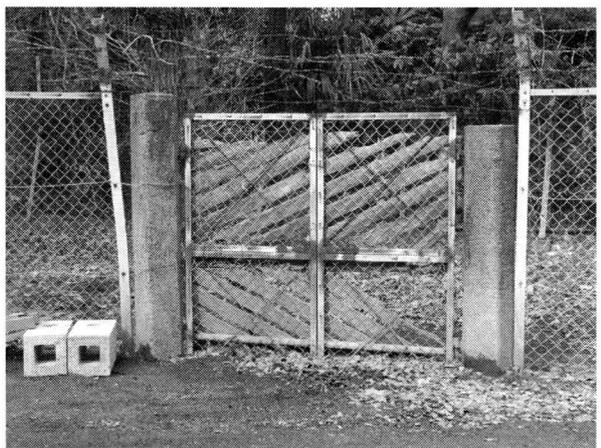
クレーンによる伐採作業



高木伐採（テーダマツ）



伐採されたテーダマツ



フェンス入口取替（作業前）



フェンス入口取替（作業後）

京都大学北白川試験地 年次報告附図

